

マガンの餌場確保についての一案



美唄の水鳥

その時、敗戦の年の初夏を想い出していた。B-29の大編隊が上空を、真っ黒にして八幡市を目指して飛んでいた。

マガンの群れは、耳を聳する鳴き声と、おびたしい数で空をささぎって舞い、沼に降りてきた。

今年、雪融けがおそかった。

美唄市の西部は、このあたりが、どこもそうなっているように、明治の区画測量の通りに、三〇〇間(約五四〇m)の正方形に区切られて道路がつけられている。美唄の街からおおよそ一七kmで月形町に行けるが、昔から「一里一尺」といわれて、西へ雪が深くなつていく。春の融雪は、一日たつごとに方眼の道路を一つずつ東から西へ融かして露出していくのである。

田んぼの黒い土面が、上美唄町にあらわれた頃になると、毎年、決まってマガンがやってくる。三・三、五・五、一〇〇羽、三〇〇羽、ある時は五〇〇と群れが増えて、全体の数が多くなっている。

朝と夕、雪が融けたばかりの水田で冬越しの落ち穂をついばむマガンは、西美唄町の水田が抜け出す四月に入ると、その数は数千羽となって、昼と夜は安全な石狩湾に戻り、朝夕は田んぼを訪れるという日課をくり返すようになる。

オオヒシクイが十数羽の家族で水田に降りたつようになると、マガンは一日に、五四〇mずつ西方に移動しながら、数を増していく。

沼があけるのも近い。

沼に、御み渡りが走ると、オジロワシがやってくる。今年、オオワシも一羽だけ寄った。気の早いオオハクチョウは、沼面に張りつめた氷の上をヨチヨチと歩きまわって氷の割れ目を探しだす。

加茂の河原で、冬を過した都鳥(ユリカモメ)の、カン高い叫び声が響きわたって、沼は完全にあけてくる。

汚れて、シャーベット状になって浮いていた氷の上で、いつまでも、じっとたたずんで餌のナマズやウグイ、フナの出現を待っていた海ワシは、時の来たのを感じて北へ去った。沼一面を、九五〇〇のマガンが黒く埋めてとってかわっていた。ここ数年、一羽だけのハクガンとシジュウカラガンが混じっている。



写真-1 水田へ降下するマガン

おおよそ二五〇のコハクチョウと、一〇〇のオオハクチョウ。ウトナイ湖で人馴れしたのか、コハクチョウは、ぐっと岸辺近くに寄って、得意のシャチホコ立ちを見せている。

白鳥がいると安心できるのか、いつもは特に警戒心の強いマガンの群れも沖合でなく、白鳥に混じって岸辺に近寄ってきて、探鳥の人びとを喜ばせる。

旧 原 野

美唄市西方の平坦地。宮島沼、親子沼、手形沼、天狗沼、貞広沼、小川沼、湧沼。明治十九—二十一年、囚人労働で拓かれた峰樺道路をはさんで、北村の丸沼、三角沼…。石狩川とその支流が、美唄市西部に広大な湿地帯を生みだしていた。泥炭湿地には、川が自身の一部を置き忘れたり、あるいは狂暴に荒れた爪跡として沼を残し、ヨシ原、ミズゴケ湿原からなる美唄原野を形づくっていた。

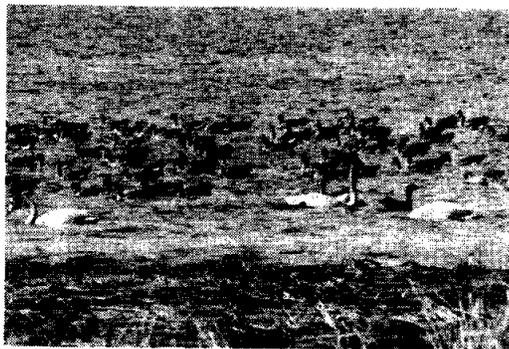


写真-2 岸辺に近づいたマガン

雁のはなし

………桜井のおばあちゃんの話は続きます。

「雁は、昔も、よくとんで来たそうですよ。うちの御先祖様は、やっと拓いた畠の先の、湿ってて、どうにも手のつけようのないヤチに出かけて行って、巢を探しては、雁の産んだ卵を、箕で拾い集めて食べなされたそうですよ。とほしかった開拓時代の、とびつきの御馳走だったんでしょネ」

当時、美唄の湿原は、水鳥の営巣に適した場所だったのでしょか。今は遠くガン達は、シベリアまで、雛を育てに旅

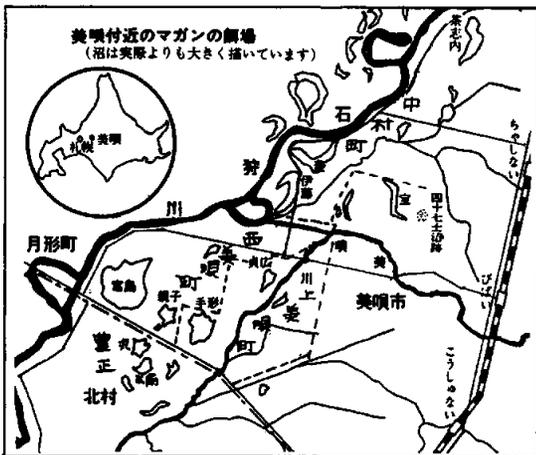


写真-3 上美唄町の水田で

明治二十五・六年頃からの開拓入植は、土地の水抜きとの闘いから始まった。幾たびもの排水工事で、湿原が乾いていった。沼が小さくなっていった。

昔の沼は、水面と岸との境界がはっきりしていなかった。浮島が浮かぶようになった。歩くと頼りのない足もとは、引きぬいた自分の足跡にすぐ茶色の水が上ってきて、沼に行く人たちは、安全のための六尺ほどの棒を持ったものだった。雨の多少や晴天のつづきぐあい、沼との境界を決めることができなかつたのに、今は、そんなところはどこにも見られない。マガンは営巣の地を奪われた。

それでも律気な彼女等は、必ず北帰行のシベリアへの旅の途中に美唄に立寄って、先祖の営巣の地を忘れないでいる。日本での、最後に寄留する土地になっていくのだという。

ガン達の採餌場所を見てみると、限られた地域にしか降りないのが面白い。北村豊正地区、美唄市上美唄町、西美唄町にだけマガンは飛来する。典型的

立って行かなくてはなりません。
(ピバ・オイの里—草野貞弘—)

な河跡沼である菱沼、伊藤沼、あるいは大きな茶志内沼のある中村町には、人間の感覚では、地理的に、すぐ近くであつても、決してマガンは、その周辺の田んぼに降りようとはしない（地図参照）。

かつての営巣地だけが、春耕のトラクターが爆音を響かせていても、彼女らにとつては、安心して採餌できる場所なのだろうか。

コハクチョウの北帰路が、旧石狩川の跡をなぞっているのだという説に、相通じるものがマガンにもあるのかも知れない。

とにかく沼があけると、マガンは昼間は安全な大きな沼（宮島、手形、三角の各沼）の中央で浮いて休み、朝夕は、雪の融けた水田で落穂を拾って、約一カ月を西美唄の地に過している。

害鳥・マガン

今年、約九五〇〇羽も来た。去年までは六〇〇〇ぐらいと数えたものだった。数が増したのに、餌場が少なくなっている。沼は、年ごとにせばめられ、岸辺まで耕されてきた。

それでも、落穂があればまだよい。

かつての彼女らの営巣地は、農民の汗のしるしとしての豊饒な水田と化してしまつたのは、まだ餌場として使えるのだからよい。

転作。

「もう、米は、作らなくてもよい」

米作農民の怒りを押えつけて、「ノーセイ」は、稲作農業から麦作へと変えられていく。小豆畑も増えていった。

融雪剤がまかれると、稲の切り株を点々と残した黒い水田ではなくて、緑色の、秋蒔き小麦の芽があらわれて、マガンは餌に窮した。

昨年までは、マガンは決して、麦畑には降りなかった。「今日は融けそうだ」という水田に先まわりして、駐めた車の中で待っておれば、必ず彼女らの方から近寄ってきて、親しく会えたものだった。動かなければ、車から出なければ、それがプライベートとなつて、なんとか近くで観察できていた。

落穂のない麦畑。数を増したガンは、困った。ついに、麦畑に降りだした。青い芽生えの、麦の葉茎を食べだした。今年、初めて見たマガンの採餌行動だった。

大規模の基盤整備事業は、稲も麦も、一時的にはつくられないで、赤茶色の地肌をまだらに融けかけた雪の間に見せている。

沼の周辺は、赤茶色、緑色の畑が増え、黒い水田が少なくなっている。マガン達は、少なくなった水田の落穂を求めて、もう、はるかに乾いて固くなり、彼女らの嘴では例え餌があつてもとりにくそうな水田にもくり返して降りて、餌を求めた春だった。

提 案

明治の昔に、自然を戻すことはできない。

このままでは、マガンは餌場を失くし、麦芽までついばんで、農民の敵になってしまふことだろう。

宮島沼に代表される沼群の禁猟区化を訴えて、農民と話した時、農民のことは、「主旨は理解できないこともないが、カモが助かってむしろのアゴが干上ってしまったからな」。つまり、秋、禁猟区にしようものなら、カモの大群が住みついて、稲穂を、穂首からそぎ落として食べるという奴らの習性にたまったものではない、ということなのである。

マガンは、春にしか沼に降りない。だから、今は農民になんの害も与えていないのであるが、今年のように、麦芽がねらわれれば、彼女らも害鳥とみなされてしまうであろう。そして、それは時間の問題となつてきているのである。

農民は米をつくりたがっているのに、行政

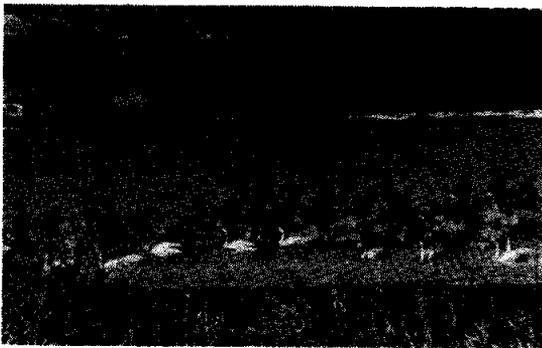


写真-4 宮島沼

は転作せよという。稲作を減反するのなら、「転作奨励金」を出そうというのである。麦をつくれという。小豆も大豆も金になるぞ、アスパラガスだ、ハスカップだ。とにかく、「金を出すから米はつくってくれるな」と、農政の強制的な指導が行われている。猫の目農政に、農民は莫大な借金をして、麦用の農業機械を買い入れなければならぬ。その麦さえ、いつまで続くものかの不安を残しながら――。農家の「あととり」への、進路指導さえ、教師達は、後継者への道を選べとは言えなくなってきたのである。

マガンの餌場を確保し、かつ、農民の利益と両立する道はないのか。

『餌場奨励金制度』を創設しよう！

① マガンが採餌する地域（美唄市西美唄町、上美唄町、他）に限って、米作減反割当をなくす。

② その地域の農家には、減反割当に見合うだけの『水鳥餌場奨励金（仮称）』を給

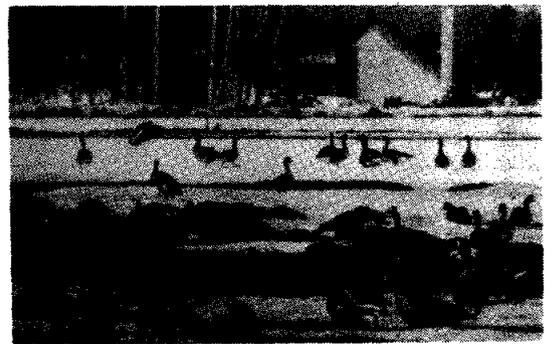


写真-5 西美唄中学校前の水田で採餌するマガン

付する。

③ 当該地域の農家は、普通に水稲をつくり、普通に収穫する。すなわち、落穂が、春のマガンや白鳥の餌となるのである。

環境庁、農水省、大蔵省、その他、関連するお役所は多方面にわたって調整を必要とする件案なのかも知れないが、これを行えば、すぐにマガンの保護に有効に作用するものと思われるし、農民の利益にも合致して、自然保護に機能することを信じて提案するものである。

諸先達の検討を乞う。 一九八三年七月

（美唄市立西美唄中学校教諭）